大津京（上）

大津京についてはすでに文化財教室シリーズ２で一度紹介された。それから10年近く経た現在では調査も進み、大津京の宮殿の位置もほぼ確定して、その中枢部の構造も一応の復原がなされるまでに進展した。ここでは、こうした新しい成果をふまえて、現時点で理解される大津京像をかいつまんで述べてみよう。

１．都城制

都は、古代において天皇・貴族を中心とする政府が国をおさめるための最高機関を置き、そこを中心にして政治を行う所である。このため、計画的な都市づくりがなされるが、これが都城で、政府のある一画を宮、官人の宅地や市、寺院、一般の人々の居住する地域を京と称している。

第１図　天智天皇像

この都城は中国の制にならって藤原京や平城京で明確に形づくられた。藤原京では東西４里（約2,120ｍ）、南北６里（約3,186ｍ）の長方形の京を形成し、その内部を碁盤目状に区切って道を通し市街を区分した。東西の線を条、南北の線を坊と呼んでその位置を示すことから条坊制と称し、12条８坊の条坊制がしかれた。そして、東西 925.4ｍ、南北 906.8ｍのほぼ正方形の宮を京の北辺中央部に置き、その内部に天皇の居住区である内裏、政治の中枢部である大極殿・朝堂院を位置せしめ、そのまわりに官衙（役所）を配している。

この藤原京がわが国の古代律令国家の最も完成した姿と考えられており、その後の都城はこの制にならったものである。藤原京以前の大津京は律令国家形成期の都城であるため、基本的には藤原京に類似した形をなすとみられるが、その実態究明は容易ではない。まず、文献から知られる大津京についてみてみたい。

２．文献でみる大津京

大津京については『日本書紀』に断片的な記載がある。

①都を近江に遷す。是の時に、天下の百姓、都遷すことを願はずして、諷へ諫く者多し。童謡また衆し、日日夜夜、失火の処多し。——天智６年(667)３月

②群臣に内裏に宴したまふ。——天智７年（668)正月

③濱臺の下に、諸の魚、水を覆ひて至る。——天智７年７月

④大蔵に災けり。——天智８年(669)12月

⑤士大夫等に詔して、大きに宮内内に射る。——天智９年(670)正月

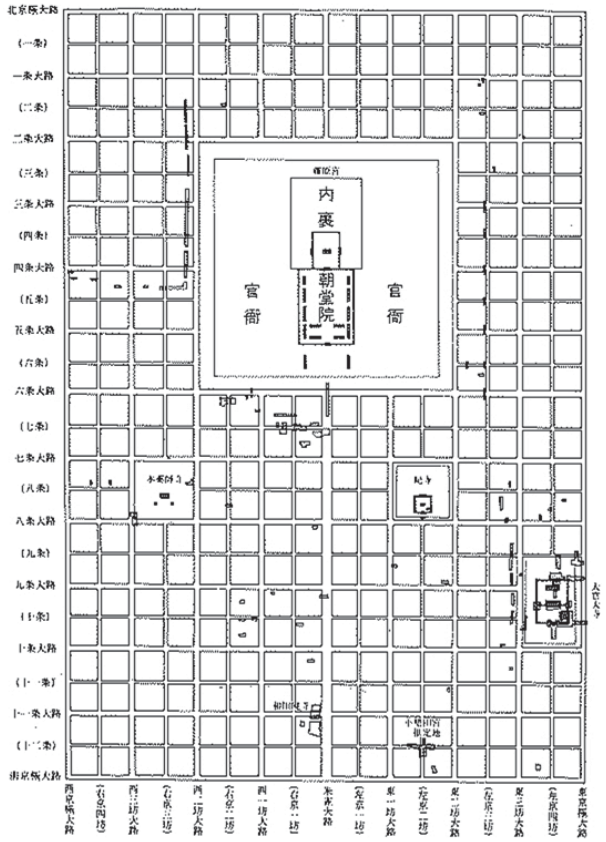
⑥朝庭の禮儀と、行路の相避ることを宣ふ。——天智９年正月

⑦大錦上蘇我赤兄臣と大錦下巨勢人臣と、殿の前に進めて、賀正事奏す。——天智10年(671)正月

⑧漏剋を新しき臺に置く。始めて候時を打つ。鐘鼓を動す。始めて漏剋を用いる。——天智10年４月

⑨天皇、西の小殿に御す。皇太子・群臣、宴に侍り。是に、田儛再び奏る。——天智10年５月

⑩内裏にして、百佛の眼を開けたてまつる。



第２図　藤原京条坊復原図(『藤原宮』による)

――天智10年10月

⑪天皇、疾病弥留し。勅して東宮を喚して、臥内に引き入れて、詔して曰く「朕、病甚し。後事を以て汝につく」と、云云。――天智10年10月

⑫便ち内裏の佛殿の南に向でまして、胡床に跪坐げて、鬢髪を剃除りたまひて、沙門と為りたまふ。――天智10年10月

⑬大友皇子、内裏の西殿の織の佛像の前に在します。左大臣蘇我赤兄臣・右大臣中臣金連・蘇我果安臣・巨勢人臣・紀大人臣待り。――天智10年11月

⑭近江宮に災けり。大蔵省の第三倉より出でたり。――天智10年11月

⑮乙丑（３日）に、天皇、近江宮に崩りましぬ。癸酉（11日）に、新宮に殯す。――天智10年12月

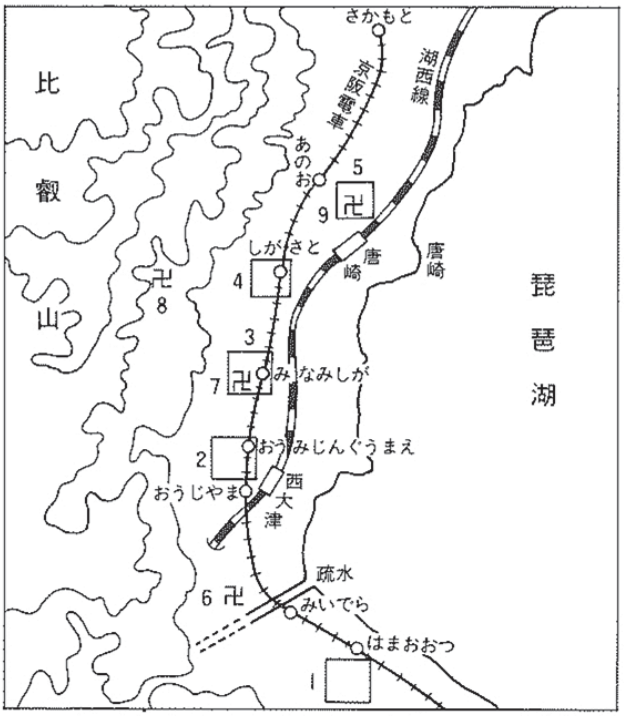
⑯大炊に八つの鼎有りて鳴る。――天智10年

⑰天皇、臥病したまひて、痛みたまふこと甚し。是に、蘇賀臣安麻呂を遣して、東宮を召して大殿に引き入る。――天武即位前紀

こうした記事からは、大津京が近江のどこに所在し、具体的にどのような構造であったかを知ることはできないが、これが当時の状況そのままに伝えたものであるとすれば、ある程度の内容は知ることができる。

①から、近江遷都は貴族や官人はもとより多くの人々が強く反発を示したことがわかり、柿本人麻呂も『万葉集』で、「いかさまにおもほしめせか」とこの唐突な遷都に疑問をなげかけている。⑤と⑥の記事からは大津京の宮には政務をとる朝庭とその南に宮門が開いていたことがわかり、朝庭の北に内裏が置かれたとみられるが、⑦から国政を執るもっとも中心的建物である「殿」＝内裏正殿の存在も知られる。また、⑨にみるように、内裏には「西小殿」があるので、対称的に「東小殿」の存在も予想できる。さらに、内裏には⑫の記事から仏殿のあったことがうかがわれるが、これが⑩から考えられる仏舎や⑬の織の仏像を納める「内裏西殿」などとどうかかわるのかは明らかでない。いずれにしても、仏的色彩の強い内裏であったと想像される。

このほかに、大蔵省や大炊省などもあった



1．大津市街地説　2．御所之内説　3．南滋賀説
4．滋賀里説　5．穴太説　6．園城寺遺跡
7．南滋賀廃寺　8．崇福寺跡　9．穴太廃寺

第４図　唐崎と琵琶湖

ようで、時を測り、時を知らせる水時計「漏剋」もあった。そして、宮城とはやや離れた湖畔には「濱台」が設けられていた。この「濱台」は『大織冠伝』には「帝群臣を召して濱楼に置酒す」とあるように「濱楼」とも呼ばれ、しばしば酒宴をはった建物である。

この他、大津京を探る文献資料として『万葉集』『日本紀略』『扶桑略記』などにわずかに記事が見い出される。

『万葉集』の

楽浪（さざなん）の志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ――巻１－30　柿本人麻呂

やすみししわご大君の大御船待ち恋ふらん志賀の辛崎――巻２－152　舎人吉年

などの歌から、辛崎（からさき）からあまり遠くない位置に大津宮のあったことが想定される。辛崎は現在の唐崎をさすと思われるが、当時の湖岸線は現在よりかなり西側にあったとみられ、全く同一位置とはいえない。

『日本紀略』の延暦13年(794)11月８日の条には、「滋賀郡の古津は旧都であったため、旧称の大津に復す」という記事があり、今の大津の近くに都のあったことがうかがわれる。

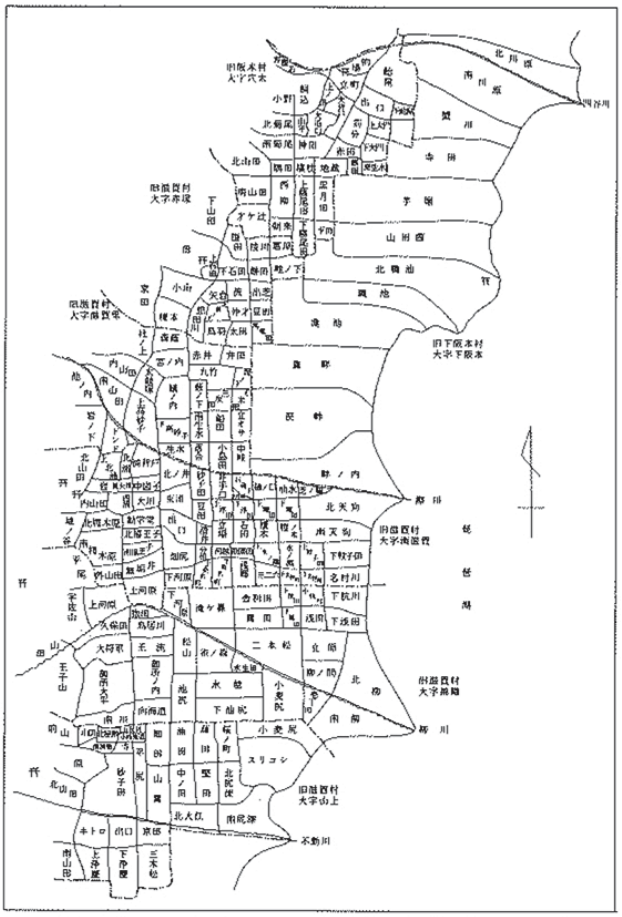
また、平安後期の歴史書『扶桑略記』には「大津宮の乾（いぬい）（北西）の山中に天智天皇によって崇福寺が建立された」という内容の記事があり、崇福寺が明確になれば大津宮はその東南の位置に当ることを示している。

このように文献からは、大津宮は旧滋賀郡、現在の大津北郊付近で、辛崎（唐崎）とはさほどへだたってなく、崇福寺の東南方に当る場所であったとみなすことができる。

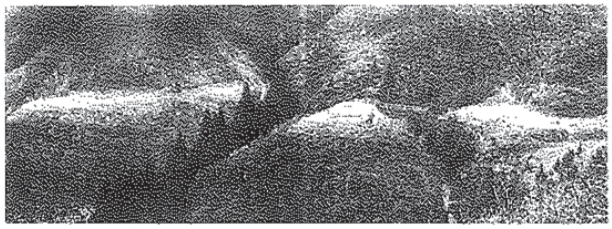
３．研究史

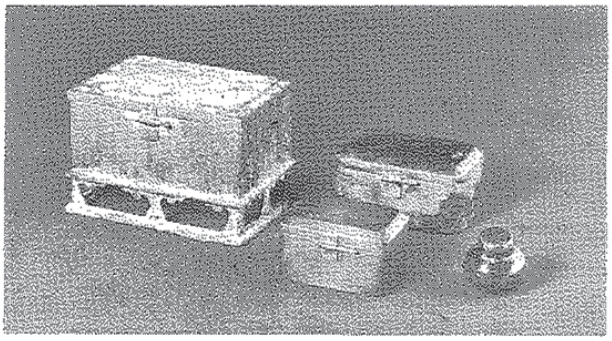
大津京は約 250年の研究史をもつ。大津宮の所在地について最初に考証したのは江戸時代の膳所藩儒学者寒川辰清であった。その後、滋賀里西方山中の寺院跡（崇福寺）や南滋賀廃寺などが発掘調査され、崇福寺・梵釈寺論争も展開された。そして、今日までその所在地・構造論などについて文献学者・考古学者・建築史学者・歴史地理学者など多くの人がさまざまに論じ、宮の所在地についてはいずれも大津市街地から穴太周辺にかけての範囲に考えられてはいるが、具体的な位置については議論風生であった。

滋賀里説　滋賀里の八幡神社周辺には「太鼓塚」「蟻之内」などの小字があるが、これは「大極（だいごく）」「荒（あれ）の内裏（うち）」の訛ったものとみて、大津京条坊の広がりを東西10町、南北20町程度



第５図　大津北郊の小字図(西田弘氏による)





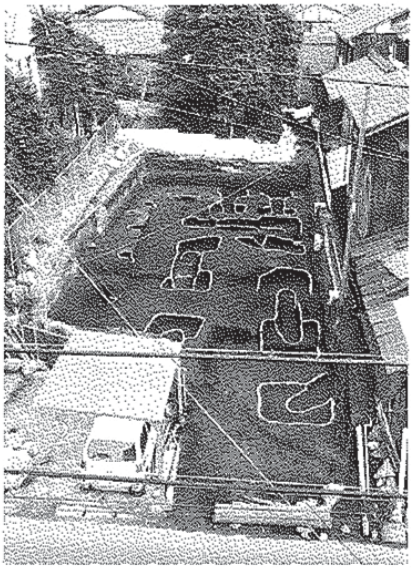
上：崇福寺跡全景―東から(滋賀県報第10冊による)
下：崇福寺塔跡出土舎利容器(近江神宮所蔵)

に想定し、平城京や平安京の宮はその北端中央部にあるため、大津京もそれと同様とみて滋賀里の「太鼓塚」「蟻之内」の地を宮とする説である。

御所之内説　大津市錦織２丁目の県道横に「御所之内」「御所大平」などの何となく宮殿に関係あるような字名がある。この字名や現在各所に東西南北に走る道や畦畔がほぼ１町四方を１単位とした碁盤目状になっているのを条里制のなごりとみて大津北郊の条里を復原し、さらに、その起点がこの御所之内地域であると考定して、これは大津京の宮殿がここにあったためにその後条里の起点となったと考え、御所之内周辺に宮を求める説である。

南滋賀説　滋賀里西方山中の寺院跡を崇福寺に、南滋賀のそれを梵釈寺に比定し、この南滋賀の遺跡には白鳳期の寺院遺構もあって、これが大津宮内にあったとされる内裏仏殿の可能性が説かれた。また、桓武天皇による梵釈寺創建理由から梵釈寺＝大津京宮殿跡とする考えや、大津京の条坊は南滋賀では特別な広がりがあるとみ、そこには「東浦」「西浦」「内山田」などの字名があって、これらが「内裏(うちつうら)」の訛ったものと考え、南滋賀廃寺を含む４町四方が内裏と考えられたりした。

大津市街地説　発掘調査によって滋賀里の西方山中や南滋賀に白鳳期の寺院跡が検出され、こうした地域に宮殿を求める声が高まったのに対し、それらを批判し、『今昔物語』や『帝王編年記』に大津宮が石山に近い粟津にあったと解釈し得る記述のあるところから導き出されたもので、かなり強引な説である。



第８図　最初に発見された宮跡

穴太説　万葉の歌から大津宮と唐崎との関係を考慮し、また、南滋賀廃寺と同様の瓦の出土するところから唱えられたものである。

４．大津宮の発見

このように、大津宮の所在地についてはさまざまな説が唱えられてはきたが、いずれも地名や条坊の復原、寺院などの間接的な状況証拠的なものばかりで、宮自体の建物といった直接的な遺構が何一つ明らかでなかったため、今一つ決め手にはならなかった。

ところが、昭和49年、錦織の御所之内の民家の建て替えに際し、偶然のきっかけから始まった発掘調査で、巨大な柱穴をもつ建物跡が発見された。これは１辺 1.5ｍの正方形に近い、深さ 1.3ｍほどの柱穴で、これが13基東西南北に整然と並ぶものであった。また、柱は直径50cmほどの円柱で、土を少しずつ入れて突き固めた版築工法によって固定されていた様子もうかがわれた。

これらはまちがいなく壮大な建物の柱穴であることが確認され、大津宮の建物跡と判断された。江戸時代以来、長い間探し求めてきた大津宮がようやくその姿を現わし始めたのである。(つづく)　　(林　博通氏提供)